

第13回国際人類遺伝学会 開催結果報告

1 開催概要

- (1) 会議名 : (和文) 第13回国際人類遺伝学会
(英文) The 13th International Congress of Human Genetics
(略称 : ICGH2016)
- (2) 報告者 : 第13回国際人類遺伝学会 (ICGH2016) 国内組織委員会 会長 福嶋 義光
- (3) 主催 : 第13回国際人類遺伝学会国内組織委員会、日本学術会議
- (4) 開催期間 : 平成28年4月3日(日)~7日(木) [5日間]
- (5) 開催場所 : 国立京都国際会館 (京都府京都市)
- (6) 参加状況 : 70カ国/3,306人 (国外1,280人、国内2,026人)

2 会議結果概要

- (1) 会議の背景(歴史)、日本開催の経緯 :

国際人類遺伝学会(ICHG)は、国際人類遺伝学会連合 (International Federation of Human Genetics Societies : IFHGS) が5年に1回、1956年から開催されている遺伝医学・人類遺伝学分野で最も歴史のある国際会議である。ICHG を日本に誘致するために、日本人類遺伝学会は、中国・韓国と共に「東アジア人類遺伝学会連合 (EAUHGS)」を2004年に設立し、IFHGSの正式メンバーとなり、2005年10月に米国のソルトレイクシティで開催されたIFHGS理事会で第13回国際人類遺伝学会 (ICHG 2016) を2016年4月に日本で開催することが正式に決まった。これを受け、日本人類遺伝学会は、日本開催準備のために、ICHG 2016組織委員会を2013年に設置し、開催の準備を進めてきた。IFHGSの60年の歴史においてアジア開催は今回が初めてであり、本分野における日本人研究者の長年の功績が国際的に認められたことを意味している。ICHG2016の日本での開催により、国際的にも日本が主導的役割を担い、本分野の研究を発展させていくとともに、国内での本分野の普及発展につなげていくことも大きな目的の一つである。

- (2) 会議開催の意義・成果 :

遺伝医学の分野はゲノム解析の技術革新が著しく、非常に活発な研究領域、診療領域になってきている、このような時期に第13回国際人類遺伝学会(ICHG2016)を開催することは、日本国内はもちろん、アジア地域において、この分野が飛躍的に発展する契機となり、時宜を得た開催と言える。本会議では人類遺伝学および遺伝医学に関する最新の研究成果の国際的な発表、情報交換の場を提供し、社会への啓発、教育の向上と発展、国際的人的交流、産学の連携を推進することを目的としている。ICHG2016は、アジアで初めての開催であり、アジアにおける人類遺伝学、遺伝医学の啓発、発展に大きく貢献するものと期待される。

(3) 当会議における主な議題（テーマ）：

「ゲノム医学が拓く明日の医療」をメインテーマに実施した。本会議における主要となる学問分野は、ゲノム医学・医療、遺伝医学・医療、分子遺伝学、細胞遺伝学、がん遺伝学、薬理遺伝学、複雑形質、多因子遺伝、精神遺伝学、発達遺伝学、遺伝カウンセリング、などがあげられる。また、健康サービスに関する研究など、近年の研究成果を含んだプログラムも実施した。

(4) 当会議の主な成果(結果)、日本が果たした役割：

この会議を日本で開催したことは、わが国および近隣のアジア諸国の人類遺伝学分野の基礎研究や臨床研究成果を全世界の研究者に大きくアピールすることができた。また、多くの研究者の参画を促す絶好の機会となり、我が国とアジアのこの分野の科学者に世界の多くの科学者と直接交流する機会を与える結果となり、我が国の人類遺伝学に関する研究を一層発展させる契機となった。

(5) 次回会議への動き：

ゲノム情報を扱うゲノム医学・医療は、先進国だけのものではなく、人類全体に関係してくることから、5年後に開催予定の第14回国際人類遺伝学会は、人類発祥の地であるアフリカ（南アフリカ、ケープタウン）で開催されることとなった。また、本領域の進歩は急速なので、5年に一回ではなく、もっと頻繁に開催することについても IFHGS 理事会で話し合われている。

(6) 当会議開催中の模様：



4月3日 Pre-Congress Symposium
Human Genetics on the Globe



Pre-Congress Symposium
で講演する松原大会長



4月4日 Opening Ceremony



Opening Ceremony
で挨拶する福嶋大会長



Opening Ceremony
で挨拶する花木 日本学術会議副会長



Opening Ceremony
で挨拶する Helena Kääräinen 先生



Opening Ceremonyで
おことばを述べられる
高円宮妃殿下



4月4日 Plenary Lecture
でご講演される山中伸弥先生



Plenary Lecture
でご講演される Eric S. Lander 先生



4月7日 Closing Ceremony
で挨拶する辻大会長



Closing Ceremony
での表彰式

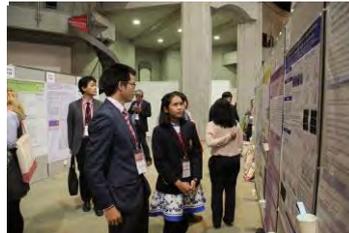


Closing Ceremony
での表彰式

シンポジウム・一般セッション風景



ポスター・展示会場風景



(7) その他特筆すべき事項：

従来、ICHGはオーストラリアとブラジルを除けば、ヨーロッパと北米で開催されてきた。人類遺伝学分野で、日本は大きな貢献をしてきたため、ICHGを日本に誘致することは、日本人類遺伝学会の長年の悲願であった。ICHGに立候補するためには、一国ではなく、複数の国からなる学会連合を設立する必要がある。日本人類遺伝学会は、中国・韓国とともに「東アジア人類遺伝学会連合 (EAUHGS)」を2004年に設立し、IFHGSの正式メンバーとなった。以後、EAUHGSは毎年、日本、中国、韓国が持ち回りで学会を開催している。このような成果が認められて、2005年10月に米国のソルトレイクシティで開催されたIFHGS理事会で第13回国際人類遺伝学会 (ICHG 2016) を2016年4月に日本で開催することが正式に決まった。

3 市民公開講座結果概要

- (1) 開催日時：平成28年4月3日(日) 13:30~16:30
- (2) 開催場所：国立京都国際会館 アネックスホール
- (3) テーマ：いでん？なんびょう？どないしよう？
- (4) 参加者数、参加者の構成：110名 主に京都市在住の一般市民
- (5) 開催の意義：人は、だれでも病気になる可能性があります。そんな中、遺伝性疾患と言われたり、聞き慣れない難病と診断されたら、より戸惑ってしまうかもしれません。今回の市民公開講座では、遺伝性疾患や難病など、困ったことが起きたときに、どのような手助けがあるのか、また、実際にどのようにすればよいのか、これから社会をどのようにしていけばよいのか、を3人の演者の講演から一緒に考える機会を作った。
- (6) 社会に対する還元効果とその成果：

遺伝やゲノムの問題は、今後誰しもが関係しうることであり、相談したいと思ったときに、どこにいけばよいのか、どのように考えていけばよいのかについて、講演者と参加者とが一緒に考える機会をもつことができた。開催に際しては、一方的な情報提供の場に終わるのではなく、参加者との相互方向のコミュニケーションがとれるように心がけた。

4 日本学術会議との共同主催の意義・成果

日本学術会議との共同開催となったことから、日本学術会議を通じての広報活動により、多くの参加者を得ることができた。また、御皇室の御臨席を賜ることができ、海外からの参加者からも極めて高い評価を得ることができた。ICHG2016で、人類遺伝学・ゲノム医療に関係する研究者が一同に会する機会が設けられたことは、今後わが国の遺伝医学・ゲノム医学の発展に大変大きなよい影響を与えたものと考えられる。